



催眠生ハメ完堕ち物語

いつものように引きこもってネットをしていた僕は、
最近入ることに成功した裏の世界で不思議なデーターを見つけた。

そこにはだれでもどこでも、狙った女を好きなように操ることができる催眠術の方法がかかれていたのだ。

ただし、その催眠術には一つだけルールがある。
たった一人の人間しか操ることができないと言うのだ。

それを知った僕は悩んだ、
いったい誰を僕専用の奴隸に変えればいいのだろう、
誰ならば僕のチ○ポを満足させてくれるのだろう…と。

三日三晩悩んで…………ついに答えが出た。

「と、言うわけでたまたまこのスイッチを手に入れたってわけなんだよーw」

「でも操れる子は一人だけって言うからさー、誰を僕専用の奴隸にするか三日三晩悩んじゃつたよ♥なんてつたてこの辺りは可愛い子がたくさんいるからね♥」

「.....」

「そしてついにひたぎちゃんに決めたのさ♥
さあ、早く僕の前に跪いて奴隸宣言をしておくれよ♥」

く、



「…………それで、話はもう終わりかしら?」

「ふえつ? イ、イヤ…だから僕の奴隸に……」

「呆れた、スイッチ一つで私を手籠めに出来るなんて
本当に思ってるの?
あなた正真正銘の大馬鹿みたいねw」

「で…でも僕の命令通りにホテルまでついてきたし…」

「それはあなたが余りにも怪しかったから少し調べようと思った
だけよ、でもその心配は取り越し苦労だったわね、
だってあなたはただの妄想クズ野郎なんですよw」

「そ…そんな…」



まさかこのスイッチが効かないなんて……
もしかしてあの声は嘘をついたんじゃ……それともあれは夢……？

い、いや、そんなはずはないっ！

現に僕はこのスイッチを持つてるじゃないか！！

あれが夢だったらこのスイッチはどこで手に入れたっていうんだよ！

そ、そうだ、願いのかけ方が間違っていたんだ！

『ひたぎちゃんは僕の奴隸にならなければいけない』なんて
分からずらい言い方しないで率直に『僕の奴隸になる』って
言えばよかつたんだ！

スルーン

支配できるのは一人だけ……願いが一つしか叶えられないわけじゃない、
もう一回やり直せば……！

「さあ、始めましょうか」

「！？」

ハーン！



「ひ、ひひ、ひたぎちやんその格好は……！？」

「その格好って……
裸にならなければ勝負を始める 것도できないでしょ？」

「勝負……？ 勝負って一体……！」

「…………はあ？」

「ホント愚図ね、いちいち言わないと分からぬのかしら？
この状況で勝負なんだから

『おま○こハメハメセックス 勝負』

に決まってるでしよう？」

「お……おま……ん」



(や、やつた…！願いが叶わなかつたわけじゃないんだ！
しつかり催眠状態になつてゐる…！しかも無自覚で……ww)

「ね、ねえひたぎちゃん、その格好恥ずかしくないの？」

「…………恥ずかしいに決まってるでしょ、あなたみたいな社会のゴミの
前で全裸にならないといけないなんて気がおかしくなりそうよ、
でも勝負には関係ないわ、勝者は敗者を好きなようにできるんだから、
全力でかかつてきなさい」

「はふふい、ところどこの勝負の名前はなんだつけ？」

「…………おま○こハメハメセックス 勝負よ……」

「ふふふふふふつ WWWWW！」

「ふふ

「ふふ

「ふふ



「さあ、それじゃあ早速始めましょう♡」

「うほおおつー?♡♡」



「うふふ、鼻息が荒いわよ、何をそんなに興奮しているのかしら?」

「何をつて……ゴクリ…
こ、これがひたぎちゃんのオ○ンコ…ピンク色で小さべで…
裏ビデオとは比べ物にならない可愛さだ…♡」

「あら、褒めてくれてるのかしら?
もつともあなたのようなゴミ肩に言われても嬉しくないけど」

「それにしても裸になつたくらいでこの慌てぶり…
これならセックス 勝負の私の勝ちは間違いないわねw」

「そ、そうはいかないぞ
この勝負に勝つて言うことを聞かせるのは僕なんだから、
まずはこの玩具でひたぎちやんをトロトロにしてあげるよ♥」

べく

「んっ……あら、それってローター？そんな物なら私の部屋にたくさん
あるわよ、悪いんだけど勝負にならないんじゃないかしら？」

「え、いくらでもあるつて……そ、それはどうして……』

「そんなの決まってるでしょ、オナニーをするためよ、

阿○々木君が襲つてくれないからどんどん性欲が溜まつてきて…
今じゃ日に三回はオナニーしないと眠れなくなっちゃったのよ』

八十

(すごい、普段なら絶対に言わないような秘密をスラスラと…)

「なるほど…毎日使ってるからこの程度じや感じないと…w
でもこういう物は使う人によつて感じ方も変わるんだよ♥』

「ぐふふ、それじゃスイッチ入れるよぉ♡』

「イイイイイイイイイイ…



「ふうん……つー

(んう……自分でするときと当たつてる場所が遠くて……
へ、変な感じい……)

「んっ……ぐううつ……

な、なるほど……確かに全然感じないって事はないみたいね……
でもこの程度じや私は……』

『グフフ、まだまだこれからだよ♡
狙いを変えて振動を『強』にかえれば……』

「んひよおおおおおおおおおつー!?



(な…なにこれっー? 子宮がっー子宮が熱くなるううううー)

「グヒヒ♥どうだいひたきちゃん、気持ちよくなつてきましたでしょ?」

「んおおっ! ご、こ、こ、こ…なんともお…んじらじら…ー! なんともないんらからあ…あひいい…つー!」



「なんだそーかあ、
それじやあもつと気持ちよくしちゃうからねえ♥」

「おひつー！ひつーんへえええええつー？」

「うわあ、すごい大声だねえw」

「ひぎゅううううううううううううつー！
や、やめでやめでっ！もうどめでええええーー！」

「ぐひひ、何言ってるんだいw
気持ちよくないんだからこのへり平氣でしょ？」

「感じてるつー！感じてるからあああああ！
本当はずつと感じてるのぉつーんああつー！あああつー！」

「らめつ！もうらめえつ！
イクウツ！イクイクツ！イツクウウウツ！」

「うほほ♡イッたイッた♡♡♡」



「あひえええ……へえ……へええええええ……♡」

んへーん
へーん

「ぐひひ、派手にイッちゃったね♡
さっきまでこんな玩具でイかないと豪語してた子は
誰だったかなあ♡」

「う…うるはいい…お豆とおじつこの穴ばっかり狙つてえ…
そんらの反則う…んああ…♡
セツクシユならあ…・絶対に負けないんらからあ…♡」

「うほほ、そうかそうか♡
それじゃ早速ハメハメ勝負で決着をつけようか♡」

「んううう…の、のぞむどんぶるよお…♡」

「はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…」

『グフフ♡さあ、次はいよいよひたぎちゃんま○こに
挿入だ♡覚悟はいいよねww♡』

『ふう、ふう…ぐ…憲問ね…
この私があなたの汚らしいち○ぽなんかに怯える訳
ないでしょ…』

『あれ、そうなの?
やっぱりひたぎちゃんは度胸があるんだなあ♡』

『う、うるさいわね、いいからさつさと入れたらどう?
こんな極上おま○こを味わえるチャンスなんてあなたの
人生にもう二度と訪れないわよ』

「よお〜、それじゃあ一気に行くよ♡」

ズニコツーズズズズズチュウウウウツー！

「んぎうううう……！
い、痛つ！いたいいいっ！－！
いだいいだいっ！いだいのぉおおおー！－！」

(お、奥まで届いてええ！
死んじゃううううう……！)

「ヒギイ…ひひひ…んぎいいいい…！」

(う、痛いいいい…！
しょ、処女を失う痛みがこんなに大きいだなんて…
痛すぎて…あたま割れそうよおお…！)

「うほ♡まさかひたぎちゃんが処女だつたなんて…
感激だあ♡も、もう少し優しくしてあげたほうが
よかつたかなあ……？♡」

「う…うるさいわね…余計なお世話よお…！
しょ、勝負の途中に遠慮はいらな…んいい…！」

「そうだよねｗそれじゃあ動かすよ♡」



ズチュ！ズチュ！ジュー・ジュブブ！ズチュ！

『んひいっ♡ひいっ♡はひゅ♡んっ♡おひゅううううつ♡』

(う、嘘つ…なんで?さっきまでは痛いだけだったのに…
もうひとつも痛くない……そ、それどころか…)

「グヒヒイイ♡ひたぎちゃん声の調子が変わってきたなあ♡
もじかして気持ちよくなつちやつた?♡』

『な、何言ってるの!?そんなわけないじゃ…ひらんっ♡』

『そうなのかなあ?
それじゃもうちょっと激しくしようかなあ…よつと』

「ひょひりひりひりいいいいつー!?」

「ほれほれほれつ♡どんどん突いちゃうぞお♡」

『やつ…やめつ…動かないでえ…つ!
ひぐつ!こ、こんな…おかしくなつちや…ひぎひひつー』

『あひつ!ひつ!ひいいいつ!
ち、ち○ぼが子宮を突き上げたりゅうりゅうー!』

「ツクッ!

「あひいいつ♥う、らめつ♥もうらめええええつ♥♥」

『よおし、まずは一発注ぎ込んじやうぞお』

『ひいいつ！そ、それはダメエエエー！』

『だめつ！だめだめつ！
中に出すのはあの人以外は絶対にダメええええええ！
勝負だからってそれだけはダメよおおお！』

『うるさい！弱点を責めるのは勝負の鉄則だろ！
僕の精液をひたぎま○こにたっぷり注いでやる！』

「おほおおお

おおおおおおおおおおおおおつ♥♥」

ビラ!

(うそおつ! うそうそうぞおおおおつ!
イッてるつー? イッてるうううううううつー?)

『ぐひよおおおおつ♥
ザーメン紋りどられるうううううううう』

『いやああああああ! やめてやめて! やめてええええ!』

「んひゅうう…♡ほひつ♡ひつ♡ふひいいい♡」

ソワソワ

(な、なに今の? 全身の感覚がおま○こに集まって…
こんなの今まで味わった事ない…ご、こんなのわたし、
頭が…おかしくなりゅうう…♡)

ブショ---

「うほおつ♡見て見てひたぎちゃん♡
お股から黄色いおじっこ漏らしちゃってるよ♡」

「い…いやあああ…見ないで…見ないでよおお…
やだあ…こんな情けない姿を晒すなんてえ…こんなの
私じやないい…!」

バチュー！バチュー！バチュー！バチュー！バチュー！

「んひゅつ♡ひつ♡んつ…♡んつ、んつ、んつ♡」

「くおおおおおおおおおつ♡
ひたぎちゃん♡ひたぎちゃんり。ひたぎちゃん♡」



「ふおおおおおつ
イクつ♡イクよおおおおおおおお♡」



「はあ…はあ…はあ…はあ…♡」

「ふほお♡気持ちよかつたあ♡ひたぎちゃんも良かつたでしょ♡」

「……べ、別に……
こんなのどうってことないわ……」

「ええ、本当に?」

「あ…当たり前よ…あなたの様な童貞の乱暴なセックス…
こ、これ以上イカされるわけないつ……♡」

『そうか分かつたよ、それじゃ僕とひたぎちゃん
どっちが先に降参するか正々堂々ハメハメ勝負だWW』



【十分後】

「んうつーんつーんううううつーんつーううううつー」

ズ!!

(んふうううくつ……だ、大丈夫…つー!
最初はこいつのセックスに主導権を握られていたけど、
集中すればなんとか快感に耐えられる…つ)

「グフウ♡思つたより我慢するねえ♡
それじゃあ僕ちよつとだけ本気出しちゃおうかなあ♡」

「ほ、本気つて…強がり言うのはやめて…ひんうつ♡
もつ…イキそうで…どうしようもないんでしょ…つー!
んひつーひああつー♡♡」

ズ!!

ズ!!

ズ!!

【1時間後】

「ひおおおおんつ♥ひやひいいつ♥
にや…にいいつ♥にやんらのおおおおつ♥♥」

「どうしたのひたぎちゃん♥
声が荒いよ？もうイカないんだよね？」

(い、いやああああつーな、なんでこいつ一度もイカないで
ハメハメし続けられるのぉおおつー?)

(グヒヒ♥願い事はひたぎちゃんが僕の性奴隸に
なることだからね、僕には絶対に僕には勝てないんだよ♥)



「ひぎいいいいいいいいつ
やつ♥やメツ♥もう許ひれええええつ♥」

「許して? それじゃ負けを認めるのかい?」

「認めるううつ♥認めましゅううううつ♥
負けを認めましゅがらあああああああつ♥♥」

「ぐひひ♥それじゃ一発イッてもうらうかつー!」

「ひよひいいいいいひよひつ！？♥♥」

(おほおおおおつ♥
イキユツ♥イキ死ぬううううつ♥)

「グヒヒ♥僕の性奴隸なり品合通り何度も絶頂しなw」

「しょ...しょんらあ.....ひ、 酷いいい.....
んひつ♥ひつ♥ひほおおおおおおおおおおおおおおおおおおつ♥♥」



「おひよおおほつおひよほおおおお……」

「あ……あひい……ま……負けれしゅうう……
あなた様のお○んぱに……完敗しまひうああああああああ……」

「あればだけ偉そうに構えてたくせに情けないなあW
負けを認めたからにはひたぎちゃんは僕の性奴隸だよ、
分かってるね♥」

「はひいい……い、今からひたぎは……
ご主人じやまに絶対服従を誓いましゅうううう……♥」

「グヒヒ♡それじゃご主人様の命令だ、もう二、三発ハメようね♥」

「ひいいつ……一ゅ、許ひれええ……つー」

「グフフ♡今日はこのぐらじにして上げるよ♡
さあひたぎちゃん、僕の息子を綺麗にお掃除してね♡」

「んつ、顔に近づけないで…く、臭いつ…♡」

『どうしたんだい？
まさかご主人様のチ○ポを舐められないなんて言わないよね？』
（ああ…どうして…？この人に命令されると逆らえなくなる…
オ○ンポを舐めることが当たり前に思えてきちゃうわ…♡）

「え、ええ…もちろん舐めるわ…♡」

セックスの後のチ○ポ掃除も敗者の大変な役目ですもの♡』

「ん……ちゅ……ちゅるう……ちゅ……ちゅつ……すちゅううう」

「ほお……おお……じじよお、裏側気持ちいいよ!!(♥)」

「ちゅるう…んつ、ホントかしり? こんなのは初めてうからよく分からなくて…ちゅ、ちゅるるつ(♥)」

ペペペ

ちゅるる

れちゅ

「くふお♡ひたぎちゃんの小さな舌が僕のチ○ボを這い回しててる♡さ、最高の気分だよ♡」

『んちゅ…大げふあね、あなたはこのわたひに勝利したご主人様なんらから…ご奉仕を受けるのなんて当然れしょ…ちゅうう(♥)』

「ぐひひ、そうだったね(♥)
それじゃお言葉に甘えてもつと激しいの貰おうかなあ(♥)」

「おひつ、喰らえッ!!」

「おぼおおおおおおお
おおおおおおおおおつ!?」



「うぐっ！ ぼげっ！ んっ、うぶうっ！ おぶう！
おぶっ！ おぶっ！ おぼっ！ おぶっ！ ごぶううつ！？」

「おほお♡ひたぎちゃんのロマ○コあつたかあい♡」

「おじつー？ んっ、んんうううううううつー！」

(ぐ、ぐるじ…喉の奥まで届いてるうう！？
ご主人様のオチ○ボなんて大きさ…こ、こんなの暴力…！)

「ほらじっかりしろ、口から出すなよ、ゲロ吐くなよ?
ちゃんと子○ボに集中して僕をイカせる事だけを考えるんだ」

(そ、そんなの無理い！無理よおおおおおつー！)

「ほらほら、スピードアップだ！」

「んばおおおおおおつ！おぼつ！ぐ、ぐるびつ！
おげつ！げえつ！おぼべえええええええつ！？」



(の、喉が圧迫されるううううつ！
このままじゃ窒息しちゃうわよおおおおお！？)

「オラオラオラ！どうだ苦しいだろう？
そのまま死んじまいなつwミ」

「うぼえええつ！んぶつ！んぶうううつ！だ、だづげえええ！」

「ふおおおおつ♡イクよ♡
ちゃんと全部飲むんだよつ…お…おおおおおおつー」

(んりゅうううううううううう
喉の奥に熱いのきてるうううううううううつ♡)

「うぶううつー？おつ！おぼつ…

ふごおおおおおおおおおおおつ♡♡♡ー」

「んひえええ…へえ♡へひいい♡ひへえええ…つ♡」

「ご…ごひゅじ…はま…じえ、じえんぶ飲みまひらああ…♡」

「おほつ♡そ うかそ うか♡
それじやあ口を開けて見せてごじらん♡」

「ふあ…ひい…んああ…♡」

おひい

ドロヘ

フフン

「うーん、少し残ってるけど…初めてにしてはよくやったね♡
褒めて上げるよ♡」

『んひいい♡あ、ありがとおがらいまひゅうう♡』

(ああ…全身に喜びが染み渡るようだわ…♡勝負に負けて従つてただけ
なのに…ご主人様に褒められるのがこんなに嬉しいだなんぞ…
こ、この方は一体何者なの…?)

「ふあ……う、嘘……ご主人様のオ○ンポ……」

「グヒヒ、全然小さくならないねえ♡
本當はこれで終わりにするつもりだつたんだけど…
悪いけどもう一回使わせてもらおうかなあ♡」



ハア~

ハア~

「うあ……そ、それは……」

(あら、私ってば何を考えてるの?
この方に命令されたら言うことは一つに決まってるじゃない(♡))

「は、はひつ♡喜んでご奉仕させていただきますう(♡)
どうぞ私の穴という穴を、全てご主人様の専属になるようお掘り
くださいませええ♡」



「あなたがメールの差出人…わたしに何かようかしら?」

「やあやあ待ってたよひたぎちゃん♥
最後に会つてから9時間も経っちゃったんだから、寂しかったでしょ?」

「……あなた何いってるの?

私があなたと会うのは今が初めてよ、その不細工な顔、
一度会つたら忘れるはずないでしょ」

「ぶひひっ、冷たいなあ♡

まあ一度記憶をリセットしたからね、分からなくて当然だよ♡」

「でも……この動画を見れば少しばかり思い出せるかもよw」

ヒュオオ。



『おほーつ♡ご主人様つ♡ご主人様ああああああああつ♡♡』

「う…嘘…なによこれ……こんなの知らない…わ、私こんな事してないわよぉ…』

『グフフ、これが真実だよwこの後もひたぎちゃんは毎日僕とハメハメしてたんだよ♡』

「ふ…ふざけないでつ…！こ、こんなの合成…そ、そうよ、合成に決まってるわ…！
そうじやなきやあなたみたいなみたいな気持ちの悪い男とこんな事するはずない…つ！」

「えー、僕との思い出を否定するのお？ちょっとショックだなあ♡』

ムニユウウウウウ

『んううつ……な、何するの……つ！？』

『グヒビ♡やつぱりひたぎちゃんのおつぱいは触り心地がいいなあ♡
ひたぎちゃんも僕に触られるの大好きだもんねー♡』

『ぐううつ！き、気持ち悪い手で触らないで…つ！
あなたのようなゲスに触られて嬉しいはずない…んつ！や、やめなさい…つ！』



『それじゃあこっちにしようっと』

「へへへ！」

「ひいひいっ！い、いやっ！いやああああああああ！」

「ひつ、このお！やめなさいっ！その汚い手をどけて…っ！
くううう…こ、こんなのおかしいわよおつ！！」

「ブフフッ♡おかしいって言うけど、そもそも大した抵抗もしないで
服を脱がされてる自分をおかしいと思わなかつたの？」

「つ！そ…それはつ…！」

「実は意識をハツキリさせてるだけで身体は僕の自由なのさ♡
だから抵抗してもムダなんだよ♡さあ、わかつたら続きをしようねー♡」

「ほーら、僕らの甘いメモリーをもう一回見ようね♥」

『んほおおおおおおつ♥いいつ♥いいれすご主人様あああああつ♥♥』

「い、嫌あああああつ！やめてえ！そんな物見せないでえええつ！」

(エ)、これが…このどうしようもなく淫らに鳴いているハレンチな女が本当に私なの？
全く記憶がないのに、この声を聴いてるとアソコが熱くなる…っ！)

「ぐひひ♥身体が熱いよお♥マゾの血が抑えきれないのかなあ？」



「んああああああああああああああああああああああつ♡♡」

「ほらほらつWここがいいんだろう♡ひたぎちゃんの身体の事なら
もう全部お見通しなんだからねつ♡WW」

『いやつ♡いやいやあつ♡そこ虐めないでええつ♡
んひいいつ♡や、やだああ♡こんな指で気持ちよくなんてなりたくないのにい…!
あひや♡ひぎつ♡ひんつ♡ひんうううつ♡』

(いやああああああああ！なによこれつ！？
なんで私こんなに感じちゃってるのぉ！？こんなのおかしいわよおおー！)



「ひやつ！いやああ！イクつ！イカされるうううううううううつー！」

「んほつ♡ほひつ♡

ほひよおおおおおおおおおお♡♡」

「おほつ♡イッたイッた♡しかもオシッコのおまけ付きだww」



プシュウウウウウウウ!

「ひうううう…い、いやあ…おしつこ出るつ…お漏らし…やつてるうつう…!
ああ…止まらないい…!」

「うほほほ♡どんどん出てるよお♡
ひたぎちゃんの尿道は本当にユルユルなんだね♡」

「あああああ…や、やだっ! 見るな! 見ないでええええええええ…!」

(い…嫌あああああ…気持ちよすぎてお漏らしじゃうだなんてえ…
しかもこんなゲスの前でえ…これなら死んでしまった方がまだマシよおお…!)

ピュ～～～

「うううう……こ、こんな屈辱……いやあああああ……！」

「あれ、ひたぎちゃん壊れちゃったのかな?WW」

「あ、あなた一体なんなのよおお……！
なんの恨みがあつて私にこんな事をするのよおおおお！？」

「まあいつもは催眠状態でセックスしてたんだけど、
ひたぎちゃんに夢中になる程それだけじゃ満足できなくなっちゃったんだよねえ♡
身体だけじゃなく心も完全に僕の所有物にしたいんだ♡」

(こ、こいつ目が本気……本氣で私を堕とすつもりでいる……！
そしてこの男にはそれをする力が……こ、怖い……助けて……助けて阿○タ木君……！)

「くうう…んう…ううう……き、キツイわ…早くほどぎなさい……つ！」

「グフフ♡どうだい、解けそうで解けないでしょ?ww」

『こ、この卑怯者つ……！
縛らないと女の身体にも触れられない様な軟弱者のぐせに
よくもこの私を……つ！』

「忘れたの？僕が本気になれば君の身体なんて簡単に操れるんだよ?
それをしないのは単にこの状況を楽しみたいからだよw」

(く…バカにしてえ……こいつ完全に私の身体で遊んでるわ…つ！)

「グフフ♡悔しそうなひたぎちゃんを激写～～♡」

ピピッ…カシャカシャカシャカシャカシャカシャ…!!

「ちょ…や、やめなさいっ！撮らないでっ！撮るなああ！」

「そんなこと言われてもこの淫乱ボディを目の前にするとなあ♡
第一ひたぎちゃんのエッチな姿はもう何百枚も保存済みだよ～～♡」

ピッ!!

ピッ!!

「ううう…こんなの…最悪よお…!!」

(最低…もう最低よお…なのに、子宮の奥がキュンキュン言つて…!
こ、これつて何なのおお…!!)

「さてど…次はお待ちかねのオ○ンボ様だよ～♪♥」

「ひつ…ひいいいつ…！？」

(な、何よこの大きさ…太くて…下手したら私の顔よりも長い…つ
こ、これは生殖器なんかじゃない…女を壊すための凶器よ…つ！)

「アイ！」
「アキ！」
「アキ！」

「む、無理つ…ムリムリムリツ…！無理よつ！
こんなの入りっこない…これでセックスなんて出来るはずがないわ！」

「大丈夫だつてw

ひたぎちゃんは昨日もこれを咥えてアンアン鳴いていたんだから、
入れればすぐに気持ちよくなれるよ♡』

「ひつ…！そ、そんなの無理つ…！無理よおおおお…！」

(わ、分かるわ…これを挿入されたら絶対におかしくなるつで…
もう二度と彼の元に戻れなくなっちゃう…
ぞ、それだけは絶対にイヤッ！)

「いやあ…セックスなんてしたくないいいい…！
お…お願い…お願いだから…うう…グスッ…グスッ…
もう…許してええ…！」

「うひょー、泣いてるひたぎちゃん可愛いすぎるーー♡
でもまだダメだね、人にお願いするんだからもつと畏まらなきや♡」

「ハア！
ハア！」

「ひっく…うう…わ…分かり…まし…たあ…！」

「え…え…！」

「やあ！
やあ！」

「お…お願いします…つ、
何でも言うことを聞きます…聞きますから…それは…それだけは
許して下さい…お願いしますう…！」

(いやあ…この私が…こんな下等な男に懇願させられるなんてえ…
夢よ…これは夢よおおお…！)

「グヒヒ、最高の気分だ…それじゃあ言う通りにしてあげようかな♡」

「でもダメ♡」

「おひよおおおおおおおお
おおおおおおおおおおつ♡♡」



「おひよおおおつ♡
ひつ♡んひよおおおおおおおつ♡」

(んやああつ！頭に何か流れ込んでくるううつ！
いやああああああああああつー！
な、何つ！？この記憶はなにいいいいいつー？)



「おひらい…ひおおお…ほひいいい…♡♡」

「おほ♡もう絶頂したの?
ピックシしてチ○ボ抜いちゃったよお♡」

ひ

ソク

ソク

ハハ

(お…思い出した…
私の身体…もうどっここの男の物になつていたんだわ…)

「ひうい…嫌あ…ほ、本当に犯されてた…
このチ○ボに調教されていたなんてえ…そんなの嫌あ…！」

「あれ、ひたぎちゃん記憶を取り戻したの?」

「ぐひひ♡まさかハメただけで記憶が戻るなんて…
記憶を消しても身体は僕のチ○ポを忘れられなかつたんだねえ♡」

「ひつぐ…許さない…あなたの事は絶対に私の手で刺し殺してやるう…！」

「ああ、その全てに絶望した様なアヘ顔いいなあ、最高に興奮するよ♡
これは記録に残さないと♡」

(くそお…私の言葉なんて少しも聞いてない…
もう私の事は全て支配したと思つていいんだわ…つ)



「さあ、マ○コがよく見えるよう尼広げるよ」

「ふう…ふう…ふう…は、はい…」

（あ……な、何でなの…？
こ、この人に命令されると…
身体が震えて…どうしても逆らえなくなるつ…！）

「グヒビ♡ビラビラのエロマ○コが丸見えだぜ♡
プライドの高い生意気女もこうなつたら無様なものだなw」

「うう…い、言わないでえ…！」

（ダメ…言い返す事もできない：
この人には勝てないって身体が覚えちゃってる…！）



「んくう……はあ……はううん……♡」

「ほらほら、オ○ンボ欲しいんだろ?
それなら雌豚らしくおねだりしないと♡」

「ふ、ふざけないで……チ○ボ…チ○ボなんて……
ほ…欲しくなんて……ないい……ないんだからああ……』

「本当に?ほら見ろよ、この逞しいチ○ボをよお♡』

「ひいいつ……!やめえ…チ○ボ見せないでえ…
そんなの見せられたら…わたし…♡』

(ああ…なんて大きなオチ○ボ…カリも反り返っていて…
あれで突かれたら…わたし…♡)

ハキ!



「はふう…ふうう…チ、チ○ボ…オ○ンボオ…♡」

(あ…あ…頭がボーッとしてうまく動かない…
分かってるのはオチ○ボ欲しいって事だけ…
ダメエ、もう我慢できないいい…つ♡♡)

「お、お願い…あなたの…」

「ご主人様だろ?」

「ご…ご主人様つ…も、もう我慢できないんですう♡
どうか…どうか私の卑しい雌マ○コに…ご、ご主人様の
雄々しいオチ○ボをあてがつて下さいませえ♡」



「ほら、お望みのチ○ボだぞつ♥」

「いっひいいいいいいんつつ♥♥」

(おほおおおおおおつ♥きたあああああああつ♥
クズ野郎の極太オ○ンボ一突きで子宮口まで
ズッボリ刺さつちやたああああ♥♥)



「んひいつ♡ひほおつ、ほおおおおおんつ
ひいつ♡気持ひいいいいいつ♡♡」

「おほーつ♡さすが極上マ○コだ、気持ちいいぞおつ♡」

(お…堕ちた……自分からオ○ンボをおねだりしちゃったあ♡
もう私の身体はとっくにこの男に堕ちて……
いいえ違うわ…堕とされたいって思っちゃってただわ…♡)

「きつ、気持ちいいれしゅううつ♡
ご主人様のチ○ポしゃいこおおおおおおつ♡」

「きひい…♡いひい…おひ…えひいい…♡♡」

(あへええ♡あ、頭おかしくなるくらい気持ちいいひい
もうダメ…こんな気持ちいいの知っちゃつたらもう
この人から離れられない…♡)

「やつぱりひたぎちゃんの穴は最高だなあ♡
これからもしたい時はいつでも気軽に呼び出すから
学校でも彼氏とのデート中でもちやんと断つて来るんだよ♡」

「はひいい…承りまひらああ…♡
お手軽セックス便所ひたぎをいづれもお呼びくらはいい♡」

(ああ…わたし…便所にさせられちゃつたあ…
ご、ごめんね…阿○々木くん…♡)



「んうううつ♡んつ♡んううつ♡んむうううつ♡」

ええ!

ええん!

ええ!

「グヒヒ、ただいま帰ったぞ～w」

ザツ、ザツ、ザツ···
ガチャ

キイイ

ベブ

ベ

「ふうつ♥んううんつ♥んぶつ♥うんううううつ♥」

（や、やっと帰ってきた…と、止めてつ♥早くこれ止めでつ♥）

「おー、1時間くらい外に出でたけどまだ意識あるのか、
思つてたより体力あるんだなあw」



「それにしても驚いたぞ、昨日あれだけ犯したのに
まさか1日でまた反抗的な態度に戻るなんて、
ひたぎは本当にじやじや馬なんだなw」

「ご主人様に刃向かうなんてちょっとムカついたから
しっかりとお仕置きしないとな♥
ちょうど放置プレイもやって見たかったし、もう少し
そのまま頑張れよw」

「おんなんうつんつんつんつんつんつんむううつんうつんんうううううつ」

「うほー♡このひたぎマジで出口いわー♡」

(や、やめてえつ♡昨日のこと思い出させないでええつ♡
オ○ンコがもっと熱くなっちゃうよ(おお♡)

「グヒヒwこれなんかアヘ顔全開って感じで
ひたぎっぽさがよく出てるなあw
ほら、ひたぎも見てみろよ…って、見れないかそれじゃw」

【2時間後】

「へうつ、イクぞイクぞお♡顔にぶっかけるぞお♡」

ピュル!

ウイー

「おんつ♡ぶつ♡んううううううつ♡」

「ふほ♪気持ちいい♪見抜きも結構いいもんだなあ♡」

「それにしても自分だけ気持ちよくなつてご主人様に奉仕するのを忘れるなんて、そんなんじゃ性奴隸失格だぞW」

「あひいいつ♡も、もう許ひれえええつ♡
死ぬ死ぬつ！死んじやうのおおおつ♡」

「いい声で鳴くなあ♡やっぱ口は塞がない方がいいかなw」

「ほれほれもっと腰振れよ、
それじゃファンも興奮してられないぞw」

「い、いやよお♡そんなファンなんていらないわあつ♡
知らない男の人に私の無様な雌犬の姿を見られていたなんてえ、
そんなの知っちゃたら…わ、わたひい…♡」

「グヒヒ、毎日更新してるからアクセス数がどんどん上がるぜw
俺はプロガーとしての才能があつたのかなw」

「おひよおおおおおおおおつ
イツちやいまひゅ♥イツちやううう♥」



(ああああああああああああ
イクうつ♥またイクのおおおおおお♥♥)

「ブフフフ w またイキやがった w」

「んひやああつ♥はひい♥はひいい…♥ひいん…♥」

(あえええええ…む、ムリい…もう何十回もイっちゃてるう
これ以上こんな目に遭わされたら…身体がもたないよお♥)

へへへ

しょろろ～♥

おほぶ♥

「グヒヒ、いい顔してるなあ♥
やっぱりひたぎにはアヘ顔が一番似合うぞ♥」

「ひいいん…お、お願い……さつきの態度は謝りますからあ…
も、もお許してくらはいい…♥」

「そうだなあ…確かに仕置きは十分だし、
よおし、罰は許してやる、これからはご褒美に気持ちよく
させてやるから残りの時間たっぷり楽しみなw」

「しょ、しょんなああつ！ま、待つて！
お願いだからもう許じでえええええええ！」

「よ、よく見えますか…ご主人様つ…」

(うう…自分からお尻を広げるなんて…
こんな無様な格好…)

阿良○木君に見られたら生きていけないわ…」

「おい、なに恥ずかしがってるんだよ、
昨日だって嬉しそうに
尻尾を振つておねだりしてただろ』『

「く…う…わ…分かつて…ます…つ』

くばあ

(ああ…またあんな事を言わせるだなんて…なんて鬼畜なの…
でも言わないとオチ○ボもらえない…
そんの…そんなの耐えられそうにないわあ…♡)

「ご、ご主人様あ♡
ひたぎはオチ○ボを前にするとだらしなく発情しちゃう
変態丸出しな淫乱雌豚ですうう♡」

「今もご主人様のオチ○ボを前にして、ひたぎのオマ○コは
エロエロお汁でべつたりになっちゃいましたあ♡」

「一生懸命オマ○コご奉仕しますう♡
雌穴フリフリしてご主人様をたくさん気持ちよくしますから
ご褒美をたくさんくらはあい♡」



「ほひいいつ♥ひおんつ♥ひんつ♥
ひひよおおおおおおおおおおおおおおおんつ♥♥」
ぐく!

「オラオラアーどうだ、気持ちいいんだろー?」

「はひいつ♥いいつ♥いいれしゅ♥
オチ○ボ気持ちいいれしゅう♥ほひつ♥ほひいいんつ♥」

(ひああああああんつ♥
気持ちいいつ♥オマ○コ気持ちよすぎるよおおおおつ♥
こんな気持ちいいと全然誤魔化せないい♥)

「コズボ!!
ズボ!!

「全くだらしないマ○コだな、ちょっと突いたらすぐ濡れ濡れになつて…おい雌豚、恥ずかしくないのか?」
(あああああんつ♥こんな奴に好き勝手言われて…
悔しいけど…オ○ンボの気持ちよさには逆らえないわああ♥)

「ほーら、
良い子のひなたぎにプレゼントだ!」

「おひよおんつ♥♥♥」

(な、なにいいつー?
お尻に変な物突っ込まれてるううつ♥)



「いひよおおおつ♥おほつ♥
おひよおおおおおおおおおおおおおつ♥♥」

「ひへつ♥ひほつ♥ほおおおんつ♥♥
しょんらつ♥お尻きもちいいつ♥♥
お尻の穴ズボズボされるうけでもイッちゃうう♥」

「どうだ？ 気持ちいいだろう。
性奴隸なら尻穴も使えるようにならないとな」

(い、いやああつ♥ど、どうしよう、嘘じやないっ
私本当にお尻で感じちやってるううううつ♥)

「げヒビ、すげえイキつぶりだつたなあw」

「おひつ♥ひつ♥ほひつ♥ほおおん♥」

「んほおおおおおおつ♥イ、イツちゃつたあ♥
お、お尻がこんなに気持ちいいなんてええ…♥♥」

「バーカ、そんなわけないだろ。
そこで感じるのはお前が淫乱な雌豚だからだよw」

「い…淫乱…うう…うぐうううう…」

(認めるしかない…だって、私こんな乱暴にされて…
すごい幸せになつちやてるもの…こんなのもう否定なんて
できないわああ…♥)

コバア

トブウ♥

ギーイン

「ンチユウツ♥ふつ、ふああ♥れちゅうつ
はあああんつ♥ご主人様しやまあ♥」

「おい、もっとベロを絡めろよ、
そんなんじやちつとも気持ちよくねえぞ」

「は、はひいつ♥もうひわけごらいまへんうう」

「んつ♥ちゅるるるつ♥はつ、はふつ♥
ずちゅるうつ♥ふはつ、い、いかがれすかご主人様あ♥」

「ああ、その調子だ、
始めの頃よりだいぶ成長したな♥」

「はひい♥ありがとうございますう♥
お褒め頂き光栄れすう♥」

レロレロ

チャフラン

ガチヤ!

おい！戦場ヶ原！そこにいるのか！？

「おっと電話がかかってたぞw
ほら早く出ろよ、あんまり相手を待たせるじゃねえぞw」

「はい♡承知いたしましたあ♡」

「はあはあ…♡
こんにちわ♡、阿良○木くん…♡」

カチヤ

『せ、戦場ヶ原…よかつた無事だつたんだな、
一ヶ月も連絡取れなかつたんだぞ！お義父さんに
聞いてもわからないって言うし…一体どこにいるんだ！？』

「だ、大丈夫っ…よおつ…んううつ
心配してくれて…ありが…とお…つ…ひああんつ」

『し、心配するなつて…そんなの無理に決まつてゐるだろー？』

「はあうんんうつ♥ご、ごめんね阿○タ木くうん
わ、わたひ今忙しいから…んはああんつ♥」

「あ…後でまた連絡するから…ひうううんつ
きよ、今日は切るね…つ♥」

『忙しいって…
い、今なにをしてるんだよ！？』



「わたしは…わたしは…わたしは…今あ…」

『ご主人様とセックスしてるの♡』

は?』

べく、！

べく。

「んひやひいいいいいいいつ♥
ご主人様の極太チ○ボ気持ちよすぎるのお♥」

「せ、戦場ヶ原……?
ハハハ、冗談だろ…
お前何言つてるんだよ…」

「ひおおおおおおおつ♥
こ、こんなすごいの知っちゃたらもう阿良々木の
粗チソなんかじや満足れきないいいいいつ♥♥」

「そ…そんな…
い、いやだ、お前
何言つてるんだよー?」

「ひよおおおおおおんつ♥
イクイクイクウウ♥あなたも私の声を聞いて
絶頂ひれえええええつ♥♥」



『や、やめろおつ!
それ以上はダメだあああああ!』



「もう無理いっ♥♥
んひよ♥おひよおおおおつ♥♥」

「はひいい…♡ひいん♡いひいん…♡♡」

「せ…戦場ヶ原…ど、どこにいるんだ?
誰かに無理やり言わせるんだろ?おれが助けてやるから…」

「ご…ごめんれ阿良○木くうん…♡
もうわたひ…あなたのところには…戻れない…
ううん、戻りたくないのぉ♡」

「つ!…?」

「私の幸せはご主人様にご奉仕することなのぉ♡
ご主人様に出会ってからはそれまでの人生が無意味だつたって
はっきり分かつちゃったのぉ♡」

はへへ

「だからもう阿○々木君にい云いたいなんて
これっぽつとも思つてないのぉ♡
諦めて新しい女でも見つけてねえ♡」

「あ…あ…うああああああああああああああ…!」

「んはあああつ♥あひやつ♥
ひやううんつ♥いひいいいいいつ♥」

ホント

まほ

「おい、マ○コがどんどん緩くなってきたぞ、
もっとキツく締めやがれ雌豚、ホント役に立たねえなあww」

「はひいいつ♥締めましゅつ♥
オマ○コぎゅつて締めましゅううううううううつ♥」

(ああああんつ♥叱られることも喜びになっちゃう
わ…私もう完全にご主人様の虜なんだわ…♥♥)

「おらあーイクぞイクぞ、気張りやがれよー！」

「はひいいいいいいんっ♡
お言いつけ通り淫乱ま○こキツくして
ご主人様をイカせしましゅうううううっ♡」

「んおつ♡おつおおおおおおおおおおおおんっ♡」

びく

!!

びく

ヰギ
ヰギ
ヰギ
ヰギ

「えひいい…♡ひおおお…おおん♡んひい♡ひへおおおおお♡」

(ひやあああ…わ、わたひイクのがどんどん早くなつてる…♡
ご主人様好みのメス奴隸に調教されてるんだわ…ああ、素敵い♡)

コホオ~

ハア~

「おいおい何惚けてるんだよ、まだ使える穴は残ってるだろ?」

「は、はひい♡申し訳ござりませんう♡」

「ど、どうぞご主人様のお好きなように変態ひたぎの
尻穴マ○コを嬲けてくださいませえ♡」

「よおし、ありがたく受け止めよう!」

ズブズブズブズブズブズブウウウウウツツ!!

オ!

ト
オ

「んひよつ♡ひよほおおおおおおおおおおおんつ♡♡」

(ああああああああつ♡♡
尻穴つ♡尻穴マ○コきひやああああああつ♡
第二の性器しゃいこおおおおおつ♡♡)

「んひよつ♥ほつ♥おひよつ♥ひよおおおおおおつ♥」

(ああああんつ♥お尻拡がっちゃうううう♥
極太チ○ボでお尻ガバガバにされちゃうのおおお♥♥)

『ゲヘヘッ、大分ケツの穴でも感じられるように

なったじやねえかw
おらおら、ここがお前の弱点なんだろ?』

「ひやひいい♥ケツま○こ気持ちいいれしゅううう♥
育ててくださったご主人様には感謝しかありまひえんうつ♥」

「ひやひいいいいいいいいいいつつ♥♥♥」

ズくズく!

ホ

ズ
ル
マ
ス

!!

「イキゅうううつ♥

尻穴マ○コイキまさゆるうううううううつ♥♥♥」

ズく!
ズく!

「おへええええ♥ひ…ひいいいいん…
せ…精液いっぱい…わたひの穴に注いで下さって…ありがとうございますう♥」

「グヒヒ♥もうすっかり俺の虜だなw
この間まで付き合っていた彼氏のことなんて忘れちまつたんじゃないのか?」

「はあい♥阿○々木くんの事なんてえ…も…どうでもいいれしゅうう
ご主人様がわたひの全てれすうううう♥」

(ああん、気持ちいい♥
愛した人を裏切つて雌豚として振る舞うのが最高に気持ちいい♥
わたし…こんなクズ人間だったらんてえ…♥)

「はあああああん♥これからもお好きな時に
好きだけ可愛がつてくださいましい♥ご主人様ああ♥♥」

【 某月某日 阿○々木宅 深夜2時……】

「うううああああああああ……」

「せ……戦場ヶ原……だ、ダメだ……
そつちに行つては……うああ……待つてくれえ……」

「…………きて……起きて……起きて、阿良○木くん……」

「せ……戦場ヶ原………?」

ガガ
ヰヰ

ガガ
ヰヰ

「せ、戦場ヶ原！？今までどんに……！？」

「？ 何を寝言を立ててるのかしら？
わたしはさつきから寝坊助の目の前にいるのだけれど？」

『そ……それじゃさつきまでのは……夢……
よ、よかつた……』

『何を安心してるのが分からぬけれど急がなくていいの？
このままじゃ学校に遅刻してしまうわよ』

『そ、そうだった、急いで着替えないと……』

「なあ戦場ヶ原、一つ約束をしてくれないか？」

「なあに？言つてみてもいいわよ」

「これから先……何があつても俺がお前のことを守るから、
だから俺を信じて……ずっと一緒にいてくれないか？
この先、死が俺たち二人を分かつまで、ずっと二人で生きて…」

「嫌よ」

「い、嫌つて……即答しないでくれよ、
これは冗談なんかで言つたんじゃないんだからな…」

「嫌よ、だつて私には
』

『愛すべきご主人様がいるのだもの♥♥』

「んひいいいつ♡ひいんつ♡ひいいいんつ♡」

ムーン

「せ……戦場ヶ原ああ！」

「あ、元カレ君やつと起きたねw
幸せそうな顔してたからよっぽどいい夢見てるんだけど
思って起こさなかつたんだよ♡」

「お、お前！お前が戦場ヶ原を犯してたのか！？」

「犯すなんて人聞きが悪いなあw
これは同意の上でのラブラブエッチなんだよ、なあ雌豚？」

「あひやああんつ♡気持ちいいつ♡
ご主人様チ○ボよすぎれしゅうううううう♡♡♡」

バイ〜!

「ハハ、聴こえてないかw」

「待ってる戦場ヶ原…僕が今すぐ助けて……ぐううー」

「グヒヒ、起きられないだろ?
君が寝てる隙に身体を麻痺させる薬をたっぷり
塗りつけたからねえw」

「それにこれは合意だつて言つてるだろ?
こいつもこんなに嬉しそうに……なあ雌豚あ?」

「んほおおおおおおおおおおおおおおおおつ♥」

「ひや、ひやひいい♥
ご主人様チ○ボで可愛がつていただいて…つつ♥
ひたぎは世界一の幸せ者れしゅううううつ♥」

『そ、そんな……嘘だろ……?』

「それじゃ俺たちはそろそろ行くかな、
おら雌豚、元彼に最後のお別れをいいなw」

「スホ」「スホ」

「ひおおおおつ♥
ひや、ひやひい、ご主人様あつ♥」

「おひいご、ごめんね阿良○木くうん♥
あなたの事は愛していただどお！…でも極太○ンボの前
ではあんたなんてゴミカスも同然なお♥」

「せ…戦場ヶ原…？」

「んひいいつ♥イクイクつ♥
もうイツちやいまひゅううううううううううつ♥♥」

「おひよおおおおおおおつ♥♥
イキゅうう♥お漏らし絶頂しちゃうううつ♥」

「んひよつ♥ひよひよつ♥♥
ひよつひいいいいいいいいつ♥♥」



「なんとか体勢だけは維持できたな、今回は及第点をやろうか！」

「おほおおおお…♡」

「あ、ありらど…ごらいまひゅう…ご主人様ああ♡」

「そ…そんな…あの戦場ヶ原が…ご、こんな…』

『ゲへへ、こんな淫乱になつてショックかい？

まあこれに懲りたら一人寂しくマスカイトで生きていくんだね

さあ、行くぞひたき♡』

『はひい♡ご主人様の仰せのままにい…♡♡』

『ま、待つてくれ…戦○ヶ原、行かないでくれっ…』

『頼むつ！お願いだから！行くなつ…！行くなじやない…っ！』

『!!-ಜ್ಯಾಕ್ ಅಂಡ್ ಬ್ರಹ್ಮಾಂದ್ರಾಂದ್!!』

FIN